

三村合同住民海外研修事業

ドイツ・フランスを訪ねて

5回目の今年は、研修先を再びヨーロッパに移し、10月31日から11月6日までの7日間の日程で実施されました。

今回の研修は、ドイツで環境問題行政と農業行政、フランスで福祉（高齢者対策）及び経済視察として農業協同組合を視察してきました。

11時間余りの長い飛行機の旅の末、降り立ったフランクフルト空港は、（時差の関係で31日の夕方）BGMなど余計な音のない落ち着いた雰囲気で見学を迎えてくれました。

2日目は、移動日でニュルンベルグへの250キロのバスの旅となりました。ドイツの面積は日本の95%ですが、平原が国土の70%もあるため豊かな広さを感じました。

ニュルンベルグ市は、古城街道の途中にあり、中世と現代が調和した街並み特徴の街です。行程も3日目になり、この街から本格的な研修が始まりました。

「環境問題」への取組について、まず、シーメンス社の工場を視察しました。シーメンス社は世界で一番古い電気メーカーで、日本の電力会社が50Hzと60Hzに分かれた原因にも関係した会社だそうです。この会社は、早くから環境問題に取り組んでおり、昨年は国際規格であるISO14000を取得しているという事です。まず、安全対策、環境問題部の責任者の方から説明を受け、その後、工場内を見学しました。

この工場は、ニュルンベルグ市とともにいち早く環境問題に取り組んでいるという事で、工場の見学後、市の環境局の担当者から「アゲンダ21」という市の環境プロジェクトなどについて説明を受けました。ドイツでは、第二次大戦の教訓から中

央集権化を防ぐため地方分権が進んでおり、環境問題に関して、公共団体ごと、それぞれの工場ごとに独自の指針をもっているという事です。

ニュルンベルグでは、経済と環境の接点を探り、ここ10年ほど市と企業が密接に共同作業を行ってきており、市は環境に適応しながら優秀な製品ができるよう企業に援助したり、市民に情報提供し各種の活動に参加できるようにしているそうです。

シーメンス社、市の担当者とも、大変いいねいに対応していただき、また質問なども多くで、充実した研修初日でした。



▲ミュンヘン市カールスハウフ農場の食堂入口前で

にあるクラインガルデン（市民農園）と農場を視察しました。クラインガルデンは日本の市民農園とは大分、趣を異にしており、現在は福祉政策の一環となっています。土地は市有地でこれを「協会」が借り、それを会員がそれぞれ借りるしくみになっています。

協会は利益を得てはいけない組織で、2年に一度、選挙で選ばれる会長も名譽職になっています。借りることのできる人の条件として、「庭がない」「収入が少ない（年金のみ）」などがあります。平均250㎡の区画の中に、小さな小屋があり、庭や家庭菜園になっています。土地の使用料はかなり安く抑えられており、小屋は60万〜100万円位という事です。

小屋は、寝泊まりしてはいけないうえに、電気、ガス、水道の設備はありませんが、居こちのよい部屋、ミニ別荘という雰囲気、いかにも生活を楽しむための場であることが感じられました。もう少し、早い時期であれば花や野菜の緑が美しく、ただらうと少し残念でした。あいにく雨の中でしたが、写真が趣味という会長さん夫妻と記

念写真に納まって視察を終えました。この後、市営のカールスハウフ農場を視察しましたが、ミュンヘン市の土地を12軒の農家が借りるといふ珍しい形の農場だそうです。

農地266総面積268の広大な農場で、ジャガイモ、小麦、トウモロコシなどを生産し、その他に年間4百頭の肉用牛を飼育していました。ジャガイモ、トウモロコシは工業用アルコールに農場内で加工して売却され、しほりかすは、牛のえさとしても利用されていました。

ドイツでは、専業農家は50〜60分の農地が必要で、中小規模の農家の中には、農業をやめる人もふえているそうです。しかし、国としては、農産物は余っているが、景観保護などの観点からも小規模農家を残そうとする政策をとり、実際、補助金が必要ならば農業はやつていけないようです。有機栽培など付加価値の高い農作物を生産することでドイツの農業は、安い農作物に対抗しようとしています。農家もアイデアの時代になっているそうです。

空路、次の研修先フランスへ向いました。バスポートに入国スタンプを押されることもなく、ヨーロッパはひとつであると感じました。

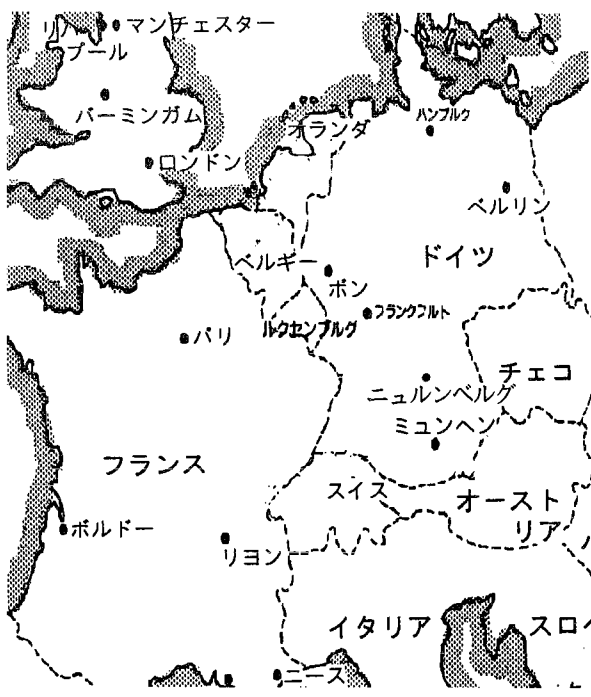
パリ到着後、ラッシュユにぶつかりパリの交通事情をまず体験することにしました。

さて、5日目はパリ近郊、セーヌ・エ・マルヌ県モル市で高齢者対策について視察しました。モル市の市庁舎は石造りで正面玄関を入るとステンドグラスがある重厚な建物でした。フランスは共和制をとっていることもあり、日本とは行政のし

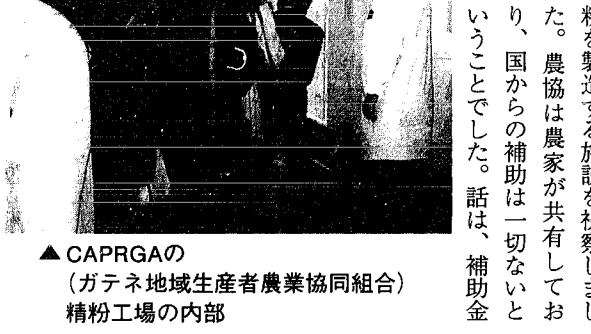
くみも大分違っているようです。説明してくださった方は高齢者担当の市議会の助役さんと市の職員の二人で共に女性の方でした。モル市の65歳以上の高齢者は3千5百人程で高齢者率ははまだ、6・8%程度で在宅老人が自立できるための援助が中心ということ。94年10月に始まった毎日の食事の配達サービスを始め、先にさげておける緊急通信サービス、マイクロボスの送迎をはじめとする交通関係のサービス、その他レジャー関係のサービスなどを市が行っているそうです。サービスの内

容により、所得に応じた負担がやはりあるようです。この他に、高齢者に対しては協会からのサービスがあり、家事などの援助が受けられるそうで、協会は、市からの援助金では足りませんが、法的には独立した機関ということ。

午後から、老人ホームを視察しました。フランスでは、希な宗教団体が経営する施設で入所者は140名、平均年齢85歳で圧倒的に女性が多いようでした。やはり、痴呆の方が多くなり2000年末をめどに新しい建物を建設予定とのこと。海のイメージというように各階ごとに色や飾つてある額などが統一されて、明るく清潔な建物でした。図書室はともかくとして、美容室の設備まできちんとあるのは驚かしました。居室は単身用で27㎡、夫婦用で33㎡、シャワー、トイレが付いており、ベット以外の家具は持ちこみ自由だそうです。入居者は、所得に応じて国から援助があるという事です。家が売却し入居する例



この研修では体験できたのではないのでしょうか。そして、この経験がそれぞれの皆さんの今後に生かされることと思います。



▲CAPRGAの（ガテネ地域生産者農業協同組合）精粉工場の内部

実質的には研修最終日になる6日目は、パリから車で1時間半のガテネ地域生産者農業協同組合を視察しました。フランスの農協は日本と違い、生産分野ごとに組織されており、今回は、穀物生産農家の農協で小麦粉を製造する施設を視察しました。農協は農家が共有しており、国からの補助は一切ないということでした。話は、補助金

限られた時間の中でしたが、参加者の皆さんは、観光旅行ではなかなか経験できないことをこの研修では体験できたのではないのでしょうか。そして、この経験がそれぞれの皆さんの今後に生かされることと思います。

今月号は、月潟村・味方村・中之口村の三村住民海外研修事業の今年度の概要をお知らせしました。来月号からは、参加された住民の方の見聞録を順次紹介させていただきます。